

石岡市北根本

明治大学大学院 富田樹

遺跡の概要

舟塚山第 14 号墳は、茨城県石岡市北根本に所在する古墳です。恋瀬川と山王川にはさまれた台地上に位置し、東日本 2 位の墳丘規模を誇る舟塚山古墳（墳丘長 183m）や府中愛宕山古墳（墳丘長 96m）をはじめ、総数 41 基からなる舟塚山古墳群に属しています（図 1）。舟塚山第 14 号墳は、舟塚山古墳の後円部に近接しており、舟塚山古墳の「陪冢」だという意見もあります（瓦吹 2009；茂木 2010、p. 320）。しかし、2013 年に明治大学が行った測量調査時に舟塚山古墳よりも新しい円筒埴輪が採取され（佐々木 2018）、陪冢ではない可能性が提起されました。また、周濠と想定される部分が地表面に黒く浮かび上がることから、独立して周濠を有すると考えられました。

そのため、舟塚山 14 号墳の本来の墳丘規模や築造時期を明らかにするために、発掘調査を行いました。発掘調査は、明治大学文学部の「考古学実習Ⅰ、Ⅱ」の授業の一環として、石岡市教育委員会のご協力のもと、令和 3 年 8 月 1 日～6 日に実施しました。

発掘調査の成果

発掘調査では現存する墳丘の南北に 1 本ずつトレンチを設定し、両方のトレンチで周濠を検出することができました（図 2、3）。周濠は、北側では幅約 4.9m、南側では幅約 3.5m、地表面からの深さは約 1m でした。

検出できた周濠をもとに古墳の規模を円墳として復元すると、直径 31m となります。詳しくは後述しますが、独立して周濠を有しており、規模を復元することができたことは、舟塚山第 14 号墳の性格を考える上で非常に重要となります。

出土品の概要

周濠からは、埴輪片や土器片が出土しました（図 4）。埴輪には円筒埴輪と、器種不明の形象埴輪が少数あります。埴輪には黒斑がみられず、窖窯焼成と考えられます。土器は弥生土器や平安時代の土器が出土しています。

円筒埴輪は、墳丘北側の第 1 トレンチで多く出土しています。特に、大きさを推定することができ、突帯の間隔が分かる資料は注目できます（図 4-1）。

円筒埴輪の技法的な特徴を抽出すると、①窖窯焼成、②精選されたきめ細やかな胎土、③外面板ナデ調整がみられる、④丁寧な内面調整、⑤1 cm 程度の薄手の器壁、⑥幅は 1 cm 前後と細身で、1 cm を超える突出がみられる突帯、⑦突帯間隔が約 17 cm、となります。

遺跡の評価

発掘調査で得られた情報から、舟塚山第 14 号墳の位置付けを考えたいと思います。まず、発掘によって独立して周濠を有することが確定したため、舟塚山古墳の「陪冢」ではないということができます。ここでの「陪冢」は、藤田和尊氏が規定した、1 つの大型古墳に対し(1)規模などが劣り、(2)同時代の築造で、(3)計画的に配置され、(4)主墳の周濠の周堤帯上に位置するか、通路など主墳の間をつなぐ構造物がある、古墳のことを指します（藤田 1993）。14 号墳は周濠を独立して持ち、舟塚山古墳と接しておらず、時期も異なるため、近畿地方の大型古墳にみられる「陪冢」ではないといえます。

また、直径 31m の円墳であることから、この古墳を「大型」として評価できます（図 5）。茨城県や千葉県では、古墳の大きさが、概ね 30m を境に数が減ることが分かっている（曾根 2009、田中 2001）ためです。舟塚山古墳群中の確実なものでは、前方後円墳の舟塚山古墳、府中愛宕山古墳、21 号墳（90m？）、円墳の 13 号墳（直径 35m）に次ぐ大きさです。14 号墳の被葬者は、舟塚山古墳に葬られた大豪族の後継首長であると考えられます。

円筒埴輪からも、舟塚山古墳の後を継いだ豪族の奥津城であることを傍証することができます（図 6）。先にあげた円筒埴輪の特徴のうち、②のきめ細やかな胎土や、⑤の薄手の器壁は、舟塚山古墳と共通し（井 2012）、④の丁寧な内面調整も同様の可能性があります。つまり、基本的な製作技法が共通していることから、舟塚山古墳の埴輪を生産した集団の後裔が、14 号墳の埴輪を製作した可能性が考えられます。

舟塚山古墳と 14 号墳の円筒埴輪の相違点も確認しておきます。①の窖窯焼成や③の外面板ナデ調整は、舟塚山古墳よりも後出する根拠となります（川西 1978、齋藤 2019）。⑥の細身で突出する突帯のうち、細身な点は舟塚

山古墳と共通します（井 2012）が、突出する点は異なります。この突出する突帯は、小美玉市（旧玉里村）の妙見山古墳の影響とみられます（図 6 上）。

こうした特徴から、14 号墳は、舟塚山古墳よりも新しい古墳といえます。舟塚山古墳が 5 世紀初頭頃の築造だと考えると、5 世紀中葉頃の妙見山古墳を挟んで、5 世紀後葉頃の築造と考えられます。なお、⑦の突帯間隔約 17 cm という特徴も、この想定とは矛盾しません。古墳時代後期になると、突帯間隔が 14 cm 未満となるからです（図 6 下）。ただし、旧玉里村域の古墳の様相が分からないので、突帯間隔約 17 cm という特徴は舟塚山古墳群に限定された特徴である可能性もあります。

まとめ

今回の発掘調査によって、舟塚山第 14 号墳の意義が明らかになりました。舟塚山古墳と府中愛宕山古墳は時期が離れていますが、その間も舟塚山古墳群で盟主墳が築造され続けていたことが明確になりました。

石岡市小井戸に所在する要害山古墳（前方後円墳、墳丘長 75m）との関係性や、埴輪の系統関係など、検討すべき課題は多いですが、霞ヶ浦北岸地域の古墳時代中期の様相理解に大きく貢献できる調査成果だといえます。

文献

- 井 博幸 2012「舟塚山古墳群をめぐる断想—埴輪、出土・採集遺物からの接近—」『茨城県考古学協会誌』第 24 号
- 小澤重雄 2016「茨城県行方市三昧塚古墳の出土資料について」『三昧塚古墳とその時代』茨城県立歴史館
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号
- 瓦吹 堅 2009「舟塚山古墳群の陪冢の調査とその成果」『常総の歴史』第 38 号
- 草野潤平 2006「茨城県新治郡玉里村桜塚古墳測量調査報告」『考古学集刊』第 2 号
- 小林三郎編 2000『玉里村権現山古墳発掘調査報告書』玉里村教育委員会
- 齋藤直樹 2019「古墳時代の常陸における円筒埴輪と埴輪生産」『駿台史学』第 167 号
- 佐々木憲一・小野寺洋介編 2018『霞ヶ浦の前方後円墳—古墳文化における中央と周縁—』六一書房
- 佐々木憲一・富田樹・鈴木静華・安藤壮平 2022「茨城県石岡市舟塚山第 14 号墳発掘調査報告」『考古学集刊』第 18 号
- 白井久美子・木原高弘・黒沢崇・神野信・大澤正巳 2012『研究紀要』千葉県文化財センター
- 杉山晋作・中條英樹・千葉隆司・前島直人・柴田洋孝 2006『富士見塚古墳群』かすみがうら市教育委員会
- 曾根俊雄 2009「古墳の規模を考える—『大型古墳』抽出の試み—」『婆良岐考古』第 31 号
- 田中 裕 2001「編年的研究にみる前期古墳の展開」『千葉県文化財センター研究紀要』第 21 号
- 日高 慎 2001「妙見山古墳の埴輪—その位置付けと高浜入り周辺の埴輪生産—」『玉里村立史料館報』第 6 号
- 藤田和尊 1993「陪冢考」『関西大学考古学研究室開設第四拾周年記念 考古学論叢』
- 茂木雅博 2010「座談会：常陸の古墳群の地域的差異をめぐって」での発言（p. 320）佐々木憲一・田中裕編『常陸の古墳群』六一書房
- 諸星政得・松本祐治編 1980『府中愛宕山古墳周濠発掘調査報告書』石岡市教育委員会

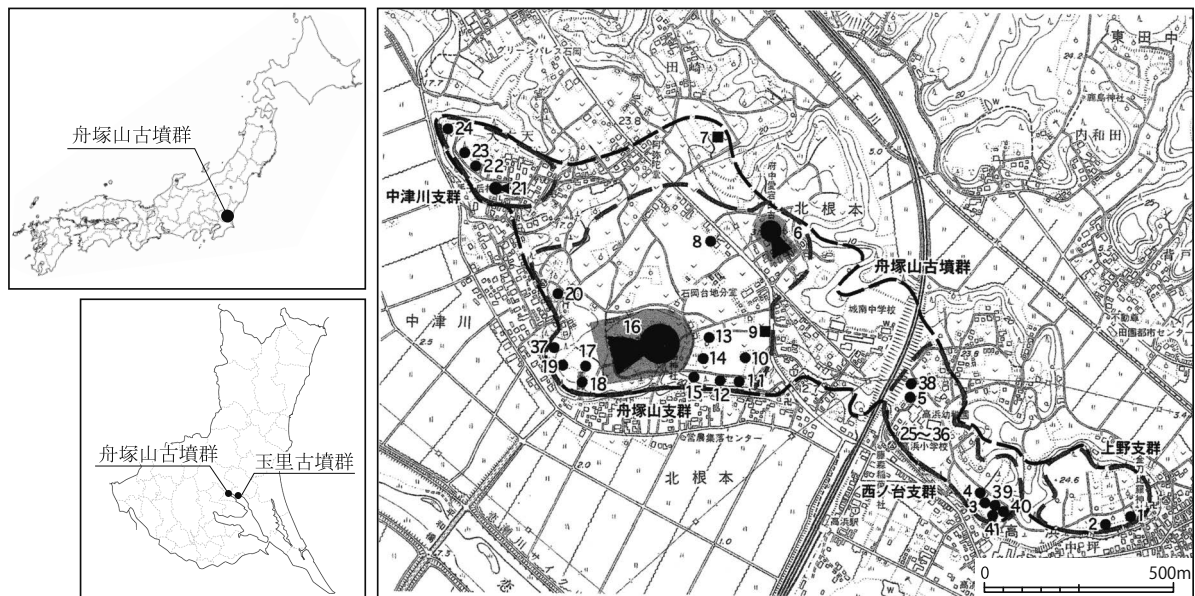


図1 舟塚山古墳群の分布

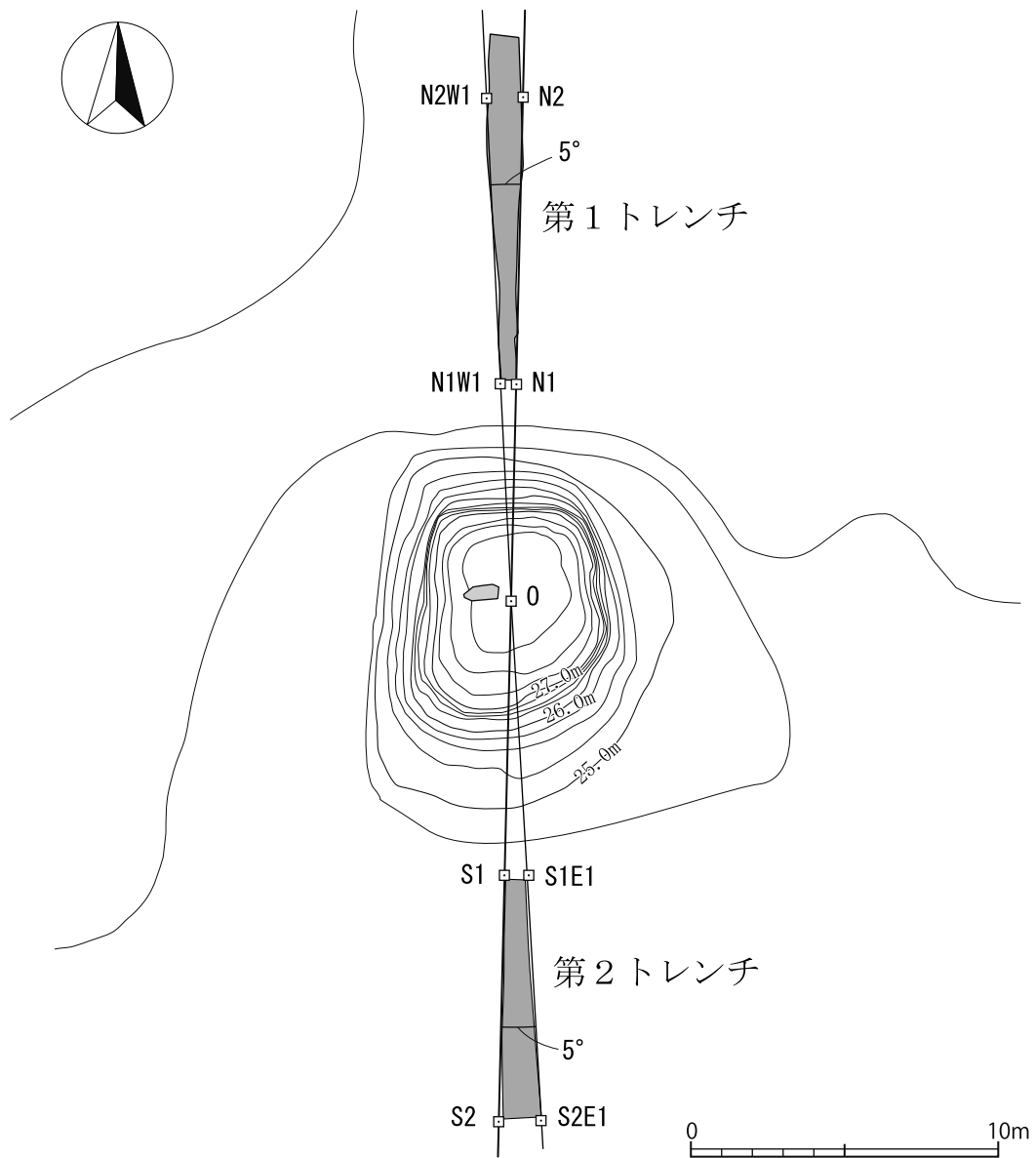


図2 トレンチ配置図

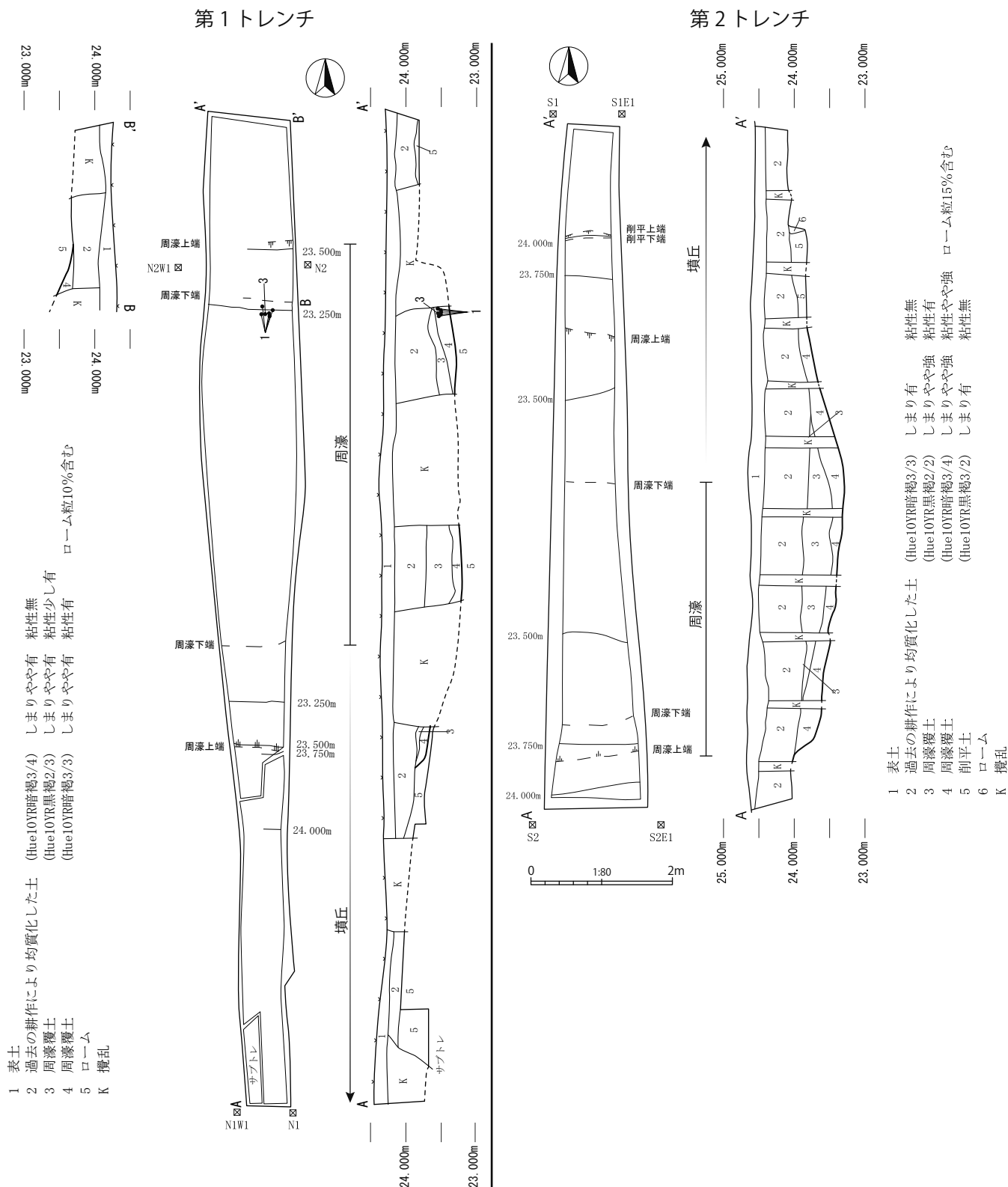


図3 トレンチ平面・断面図



图4 出土遺物

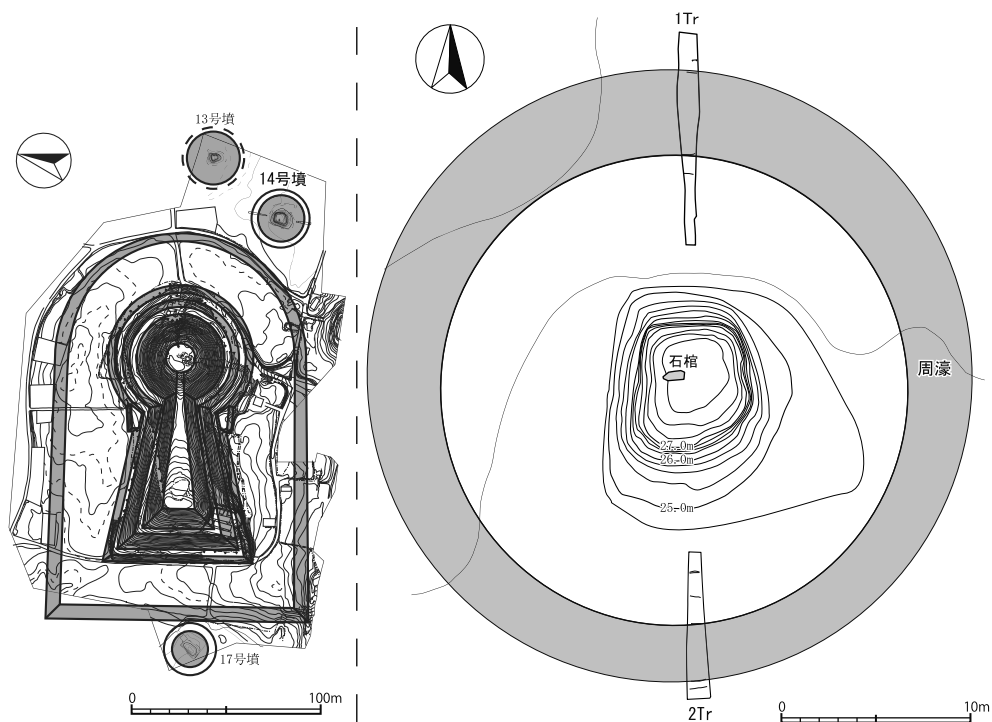


図5 舟塚山第14号墳の墳丘復元図

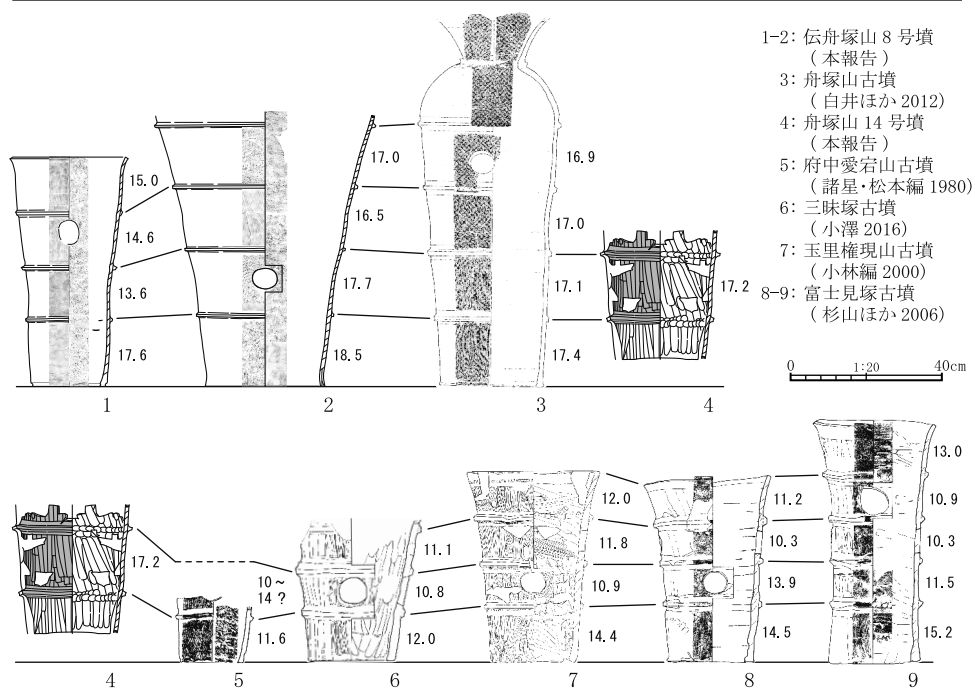
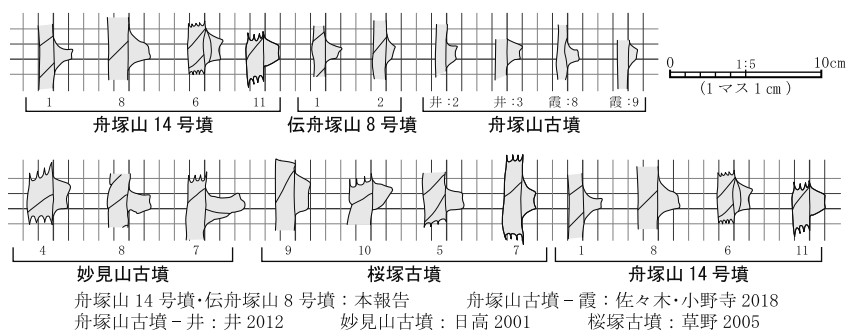


図6 周辺の古墳との円筒埴輪の比較